

I 巻頭言

2001年4月に富山大学極東地域研究センターは、それまでの学内共同利用施設として環日本海地域研究センターから、文部科学省の省令施設として発足しました。北東アジアという地域を経済、社会、環境という視点から研究するセンターで、経済系の教員4名と環境系の教員2名という構成です。

1990年代からアジアは注目を集めるようになってきましたが、極東地域研究センターの発足から9年がたち、北東アジアはさらなる飛躍を遂げ、存在感を増しています。中国は2010年に日本を抜いて世界第二位の経済大国になりました。韓国もリーマン・ショックの痛手から逸早く回復したものの、朝鮮半島の不安定性がまだ残っています。富山にとって極東ロシアは経済的関係が強い地域でしたが、08年秋以降、中古自動車の輸入関税の引き上げで、富山の輸出が激減しています。北東アジアの国々は日本と地理的に近い関係にあると同時に経済的にも強い紐帯があります。かつては「米国がくしゃみをする、日本が風邪をひく」といわれましたが、現在は「中国がくしゃみをする、・・・」にかわっているようです。でもその中国は内部には所得格差の拡大や少数民族問題などまだまだ脆弱な部分をかかえています。北東アジアの実体がどのようになっているのか、ヒト、モノ、カネ、情報が相互に行き来するなかで、極東地域研究センターが研究し、発信しなければならない課題は数多くあります。

北東アジアの国々は日本と大きな関わりがあるだけでなく、北東アジアの国々相互の交流も盛んです。日中韓のFTAが締結されたならば経済関係はどのように変わるのか、朝鮮半島の不安定性が増すにつれて、中国の北朝鮮への影響力がどの程度のものであるかについても注目が集まります。また越境する環境汚染物資はいやがうえにも北東アジアが一体化していることを実感させます。

個々のスタッフが各々の研究を進める一方で、科学研究費補助金による研究や富山県からの受託研究、海外の大学・研究機関との共同研究などで、センターとしての研究も続けています。以下、順次、個々の研究や国際交流について、紹介します。(文責：今村)

II 研究紹介(1) — 環境研究班・串田圭司 —

人間活動に由来する二酸化炭素(CO₂)の放出の削減が取り組まれています。世界の森や原野の火事(原野・森林火災)が燃焼時に放出するCO₂

の量は、こうした人為起源CO₂放出量(炭素換算で毎年7.2ギガトン)の20~60%と言われていません。火災後、森が回復すればCO₂が吸収され、再びその土地に炭素(C)が蓄積されます。しかし、火災が高い頻度で起こるようになると、その土地が蓄えている炭素の量が減ります。このことは、陸から大気へCO₂が放出することを意味します。

今後、地球が温暖化すると、原野・森林火災は増えるのでしょうか?温暖化が進むと、大気中の水蒸気が増え、地球全体で見ると降水量が増えそうです。ただし、大気大循環モデル(GCM)の解析によると、極端な豪雨と極端な乾燥が起こりやすくなると言われてしています。GCM解析を用いた地球全体の評価によると、火災の広がりやすさが増す地域が、火災の広がりやすさが減る地域よりも広がると予想されています。

そもそも、原野・森林火災の発火原因は何でしょうか?北米では、落雷によるものが最も多いようです。それを除くと、世界的には、ほとんど人為によるようです。つまり、乾燥している時の、火の不始末、焼き畑の延焼、森林伐採後の火入れの延焼などが、原因となっています。人が森の奥地まで入るようになると、発生が広域化します。そう考えると、原野・森林火災の発生は、経済・社会の状況に関わってくると言えます。

このように、原野・森林火災には、経済・社会の要因と、気象、気候や原野・森林の広がり、状態など自然の要因の両方が関係しています。煤や煙の発生により、越境大気汚染にも影響を及ぼします。極東ロシアでは、近年、原野・森林火災が頻発しています。今後、北東アジア、シベリアのほぼ全域で原野・森林火災が増大すると予想されています(Pechony and Shindell, 2010 – PNAS)。しかし、まだまだ解明されていないことが多くあります。こうした現象解明と同時に、火災を抑止する対策も講じる必要があり、そのためには、自然の要因だけでなく、経済・社会の要因も考えなければなりません。私は地球観測衛星画像解析とフィールド調査を合わせて研究を進めています。(文責：串田)



極東ロシア・ブラゴベンシチェンスク近郊火災跡地

III 講演会・シンポジウム等実施報告

極東地域研究センターは地域研究を行っていますので、研究対象の地域の海外の大学や研究機関との間で、積極的に研究交流を行っています。当ニューズレターでは、今後数回にわたって国際交流について紹介していきます。



第9回北東アジア学術ネットワーク（NAAN）にて座長を務める今村弘子センター長（中南林業科技大学にて）

極東地域研究センターと研究対象の研究機関との交流のなかで最も回数を重ねているのが、Northeast Asian Academic Network（NAAN：当初は北東アジア地域研究コロキウム）です。第1回は本センターの他に、中国の吉林大学・東北亜研究院、ロシアの科学アカデミー・シベリア支部経済工業生産組織研究所が参加し、ロシアのノボシビルスクで開催されました。第2回からは韓国の江原大学校・経済研究所・産業研究所もネットワークの一員に迎え、各機関の持ち回りで、研究大会を開催しています。残念ながら第8回からはロシアが財政的な理由で参加できなくなり、第9回からは吉林大学にかわって、中南林業科技大学が参加しています。

第9回は2010年11月26、27日に中南林業科技大学にて、北東アジアの経済と低炭素社会をテーマに、日中韓にオーストラリアからの発表者を交え、17の報告がなされ、熱心な討議が行われました。2011年には8月に富山大学で開催する予定です。

過去の共通テーマと開催場所は以下の通りです。

- 第1回 北東アジアにおける社会経済的発展と安定化（ロシア科学アカデミー）
- 第2回 北東アジアにおける社会経済的発展と安定化（吉林大学）
- 第3回 北東アジア—越境する諸問題—（富山大学）
- 第4回 Technological Innovations and Economic Cooperation in Northeast Asia（江原大学）
- 第5回 北東アジアの社会・経済・文化的差異を超えて（ロシア科学アカデミー）
- 第6回 Northeast Asia Countries: Fields for

Mutual Cooperation（吉林大学）

第7回 Economic Ties in Northeast Asia（富山大学）

第8回 Trade and Financial Cooperation in East Asia（江原大学校）

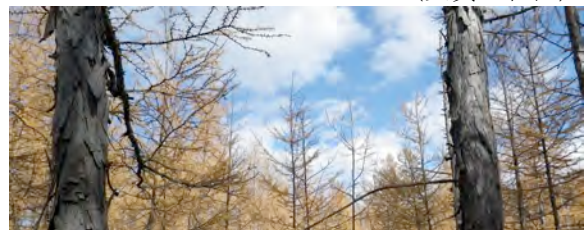
（文責：今村）

IV 研究プロジェクト紹介（1）

1）センター重点プロジェクト

平成22年度は環境研究班が担当し、「極東ロシアの気候変動・森林火災と生態系の変化」という課題で実施しました。アムール州にある極東国立農業大学との学術交流に向けて、州都ブラゴベシチェンスクを訪問し、森林火災跡地や山岳植生を観察しました。2011年3月2日には、極東国立農業大学の共同研究者3名を富山大学にお招きし、セミナーを開催する予定です。

（文責：和田）



アムール州北部のカラマツ林

2）富山県受託研究

平成21～23年度は「環日本海の物流と富山の役割」という課題で、富山および北東アジアの国々の相互の物流関係を研究しています。

（文責：今村）

V 地域研究四方山話（1）

地域研究をする上でフィールドワーク～つまり研究対象地域に赴き、研究する～は欠かせない。「百聞は一見に如かず」というが、まさにその地域の風を感じ、においを感じるによって文献だけではわからないその国のあり様を感じることができる。その地域を知る近道は食べ物である。とくに中国人は「飛行機以外の空飛ぶモノ、潜水艦以外の海で泳ぐモノ、机以外の四ツ足のモノ」を食べるといわれるほどで、かわった食べ物がある。どんなモノでも一応は試してみようと思う筆者だが、これまでの30年以上の中国研究のなかでたったひとつ食べられなかったモノがある。蟬の幼虫である。石鹸を食べたら（本当の石鹸を食べたことはないが）こんな味だろうと思われるものであった。ある土地にいったら、その土地のモノを食べることが地域理解の近道である。飲み物の紹介と、食べることの反対の行為の紹介はいずれも。

（文責：今村）